

解 説文には何をどのように表現しているか
が書かれているのだけれども、それはそれ
として、素直におもしろいと思ったのは『夜空
にて』と『魔鏡』である。西洋のまなざしによつて
構築される日本像がストレートに響く。もちろん
作者の意図は別にあるようなので、映画『ラスト
サムライ』『SAYURI』を見て「へえ」と思う、そんな
感じに似ている——としたほうが的確かもしれ
ない。いずれにしても全体的には、和楽器を
あるがままに受け入れた作風に好感をもった。

★★★(斎藤)

和 楽器による作品集第一番』から2年、
2004年～2010年の作品を集めた本
作は、アメリカ人作曲家であるマーティン・リー
ガンがさらにそのアイデンティティを明らかにした
作品群だ。和楽器や邦楽作品への深い理解
と三木稔へのリスペクトがベースになっており、
それらをクラシック音楽の理論によって再構築
していく試みは、邦楽の未来を占うものでもあ
るだろう。6作品すべてが短調の領域に属する
のも興味深い。日本の情緒は短調に限る?!

★★★★(田中)

話題のCDを4人の執筆者がそれぞれ聴いて、忌憚のない
ご意見を述べていただきます。★は五つ星が満点。



**和楽器による作品集Ⅱ
魔鏡／マーティン・リー
ガン**

5月発売／NAVONA RECORDS

CD／NV5876／1500円(予定)

●flamefox/dragoneyes/夜空にて/魔
鏡/Voyage/魔橋(以上マーティン・リー
ガン)

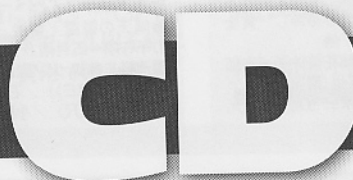
■坂田誠山/山口賢治/神令/田辺頌山
(以上尺)/野澤徹也(三)/松村エリナ/
藤川いずみ(以上21)/若月宣宏(打)/中
村仁美(箏)/他

師 との出会いは何ものにも代え難い。アメ
リカ人作曲家マーティン・リーガンは
2000年から東京音大で三木稔に師事して、それ
までの蓄積から枝葉を伸ばし、花開かせた。
世界最高レベルの仕事を行う三木の近くに居
て変化を起こさないものがあるか。何より三
木の厳しい審美眼で鍛えられる。指揮、演奏、
様々に指導を受け『日本楽器法』の英語翻訳も
した作者ならではの洋魂和才で西洋の幻想小
説を思ふエキゾチックな題材を叙情的に描く。

★★★(西)

こ のところ、日本人以上に日本的な作品を
書く海外作曲家が増加中で、邦楽に新
しい刺激がもたらされつつある。三木稔へのオ
マージュでもある本作は、師の影響か、グロー
バルとローカルの多面性が特徴。本人の言にもあ
るとおり、日本を研究した結果が、かえって自分
らしさの発見に至ったのであろう。日本らしさを
敢えて避けることをせずに、それでも個性を出せ
るということは、邦楽器のための作品が世界の
作曲家たちにも可能であることの証明にもなる。

★★★(森重)



**CROSS
Review**

ギ ターを聞いて「あ、友川カズキだ」と思っ
たら本当に友川カズキと対決していたの
で、のけぞって驚き、思わず笑ってしまった。「生
きてるって言うてみる」を連呼することで有名な
この表現者との競演一つとってみても、予定調
和を拒むアルバムの姿勢が見えてくる(しかも友
川のオリジナルまでもが歌われている)。ジャズ
ピアニスト・佐山雅弘との『東京音頭』でも歌
いにくそうな感じが伝わってきて、それがまた対
決感を滲ませていてよかった。 ★★★(斎藤)

多 喜雄の歌を聞いてスペイン語の「ドウエ
ンデ」という言葉が思い浮かんだ。フラメ
ンコなどでよく使われるが、「小妖精や小鬼」の
意(東北で言えば座敷童のようなもの)。ひいて
は舞踊や音楽の持つ魔力のことだ。労働が機
械化され、民謡が喉のパフォーマンスになった
現代だが、多喜雄と向かいあう音楽家がドウエ
ンデを招き寄せる霊媒となる。民謡本来の肉体
性ととともに、魂の叫びが聞こえてくる。これはま
さに日本のソウル・ミュージックだ。

★★★★(田中)



PING／伊藤多喜雄

6月28日発売／TAKIOプロモーション

CD／TPC-012／3000円

※HOW取扱・3826

●ひろしまきやり/アイヤ/新・乱れドンパ
ン節/どてのもぐらもちや/佐渡/やぎぶし
/おとうはとうは/他全12曲

■伊藤多喜雄(唄)/坂田明(辺・Sx)/佐
山雅弘(Pf)/宗次郎(オカリナ)/友川カズ
キ(g-Vo)/林英哲(太)/村上"ボンタ"秀一
(Ds)

ジ ャンルを超えた音楽なんて使い古された
表現をよく読むが、そう簡単には超えられ
ない。このくらいやってよ!と模範に聴いて欲し
い音盤である。人間の根源的な部分へ働きか
ける強烈な訛りの民謡歌唱を主に、モダンジャ
ズ、フォークギター、オカリナ、和太鼓、ドラムス
との共演を収録。ただ録音しただけでない遊び
心ある編集の音響効果も良い。ここまで自由自
在にやっても「民謡」という自己の支柱が揺らぐ
ことはない。お見事! ★★★★★(西)

変 わったタイトルは「ピン芸人」などという
時の「ソロ」の意らしい。名うての名手た
ちとの一対一の対決が見もの。その意味で、常
識的には「合っていない」状態こそ目指すものな
のかもしれない。その迫力と言うかスリルに思わ
ず息をのむ。大御所フォーク歌手とのドンパン
節やジャズ風東京音頭も楽しい。ソーラン節を
も含む最後の組曲は堂々たる貫禄の大曲。そ
れにしても初CD「TAKIO JINC」から26年。伊
藤多喜雄は変わっていないなあと感じ。

★★★★(森重)

西耕一(にし・こういち)——日本の現代音楽を専門に、雑誌・新聞での評論、CD・演奏会企画、解説執筆、ラジオ出演など行う。Japanese composers archives主宰。
森重行敏(もりしげ・ゆきとし)——大学で音楽理論、ステージではガムランの日々。楽器探しの骨董市歩きも恒例に。毎回一つが買わないようにしているが……。もう置き場がない!